



風しんの患者数は、2013年の流行以降、年々減少していましたが、2018年9月、首都圏を中心に再び流行し、風しん患者が増加しています。かぜに似た症状だったり無症状のこともあり、気づかぬうちに周囲にうつしてしまうケースもあることなどから注意が必要です。今月は「風しん」についてご紹介したいと思います。

風しんとは？

風しんは、風しんウイルスによって引き起こされる急性の発疹性感染症で、患者の咳やくしゃみ、会話などで飛び散ったしぶきを吸い込んで感染します（飛沫感染）。風しんの免疫がない集団において、1人の風しん患者から5～7人にうつす強い感染力を有します。子どもが感染すると、発熱、発疹、首や耳の後ろのリンパ節が腫れます。多くは自然に数日で治りますが、まれに高熱や脳炎が出ます。成人がかかると、高熱や発疹が長引いたり、関節痛が重症化する恐れがあります。

妊娠中の女性に感染すると、赤ちゃんに先天性の病気の危険

近年の流行で問題になっているのは、妊娠初期（20週以前）の妊婦が感染すると、赤ちゃんに先天性心疾患、白内障、難聴を三大症状とする先天性風しん症候群（CRS）が出たり、命にかかわる恐れがあるからです。風しんが大流行した2013年には32人、翌14年には9人のCRSが報告されています。風しんは予防接種（ワクチン）で防ぐことができますが、妊娠してからでは予防接種を受けられません。免疫が十分ではないまま妊娠した場合、妊婦自身はできるだけ外出を控えたりして感染を避けることが重要です。妊娠の予定がある女性は、事前に抗体検査を受け、抗体価が低い場合は予防接種を受けておきましょう。予防接種を受けた後、2か月は妊娠を避ける必要があります。

ワクチンについて

風しんの予防のためには、予防接種が最も有効な予防方法といえます。風しんワクチン（主に接種されているのは、麻しん風しん混合ワクチン）を接種することによって、95%以上の方が風しんウイルスに対する免疫を獲得することができると言われています。風しんにかかったことがない、風しんワクチンをうけたことがない方は、妊婦さんを守る、重い合併症を防ぐといった意味で、男性も女性も風しんワクチンを受けておくことがすすめられています。

昭和37年4月2日から昭和54年4月1日までの間に生まれた男性へ

上記の男性は、予防接種法に基づく定期接種を受ける機会がなく、抗体保有率が他の世代に比べて低い（約80%）ため、現在風しんの抗体検査と予防接種を無料で受けられるようになっています。1年目の2019年度は昭和47年4月2日～昭和54年4月1日生まれの男性に市区町村からクーポン券が送付されます。なお、1年目にクーポン券が届かない昭和37年4月2日から昭和47年4月1日までの間に生まれた男性についてもお住まいの市区町村に希望すればクーポン券の発行が可能です。

家族や職場などの周辺に妊婦がいなくても、外出先で妊婦に近づく可能性は誰にでもあります。年齢性別を問わず、風しんから妊婦を守るためにまずは抗体検査を受けましょう。



全国の処方せんを受け付けます
お気軽にご相談ください

きりん薬局原田店

球磨郡多良木町大字多良木2899

TEL 42-6900

FAX 42-6910

今月の担当は、薬剤師 川内です